食育部会

食をみつめる　自分をみつめる

１　研究の内容

（１）部会テーマと「学びをあむ」

食育部会のテーマ「食をみつめる　自分をみつめる」は、子どもたちが様々な視点から食をみつめる経験を重ね、そうした経験から自分の食をふり返り、自分や自分の生きる社会にとってよりよく、心地よい食を考え続ける姿をめざして設定した。これまで食を楽しむ気持ちを土台に置くこと、また子どもたちが互いの考えに触れることを意識しながら実践を行ってきた。

他者の考えに触れ、今まで意識していなかった事柄に目を向けたり、自分の経験と照らし合わせたりすることでその違いや自分の食べ方に気づく。個の学びと協働的な学びが行ったり来たりしながら、自分（たち）の食を考えていく。食に関する様々な経験をあみ糸として、自分の食を考え、思い描いていく姿は、本校の研究全体テーマ「学びをあむ」に通じるものである。

（２）子どもたちの興味関心にもとづいたプロジェクト型活動への栄養教諭の関わり

2019 年度に教育課程の中核として新領域「てつがく創造活動」が立ち上がり、個々の興味関心にもとづいたプロジェクト型活動が進んでいくと、それに関係して自分たちが考えた料理を給食に出したいと相談にやってくる子どもたちも増えてきた。じっくり取り組める時間をいかし、子どもたちと試作して料理の見ためや味わいを共有しながら、プロジェクトで考えだされた料理を給食につなげる機会も多くなった。しかし子どもたちの料理を給食で提供できるように調整していく過程では、自身が主導しているような感覚もあり、その料理を給食として提供することの意味に立ち止まり、自身の関わりが果たして子どもたちの活動に寄り添えているのかと考えるようになった。

そこで本稿では栄養教諭の視点から、食に関係するプロジェクト活動に取り組んだ子どもたちに焦点を当て、形を変えてつながっていく子どもたちの食への興味と栄養教諭の関わりについて報告したい。

２　実践から見た子どもたちの姿

一学期のてつがく創造活動の時間に「自分たちが考えた料理を給食に出したい」と、４年生のＡ児、Ｂ 児、Ｃ 児がやってきた。出す料理はまだ決めていないが「給食に出してみんなにおいしいと言ってもらいたい」と言う。Ａ児とＢ児は昨年度のプロジェクト活動でそれぞれ自分たちの考えた料理を給食に出したことがあり、Ｃ児は栄養教諭（以下、教師）のところへやってきたのは初めてだった。

一学期中に給食に出すなら６月上旬にはレシピを決めて試作しようと見通しを伝えたが、パンなのかデザートなのか、これといった料理が決まらず時間が過ぎていく。料理の絵を一緒に描いてみたり、７月に出すことに焦点を当て「７月と言えば？」「夏においしい食べ物を使ってもいいね」などと投げかけたりしたが、アイデアがまとまらない。偶然通りかかった給食調理員の「７月なら七夕もあるし、７色のなにか料理ができたら…」という言葉をきっかけに、３人はパプリカやコーン、もやしなど７色の具を使った「セブンカラー冷やし中華」を考え出した。教師は給食調理の視点から食材や盛りつけで変更が必要な箇所を伝え、味つけはどうするかをたずねると、料理本に載っていたごまだれをアレンジし、白練りごまと黒練りごまの両方を使ったごまだれにすると言う。こうして料理のイメージができあがった（図１）。

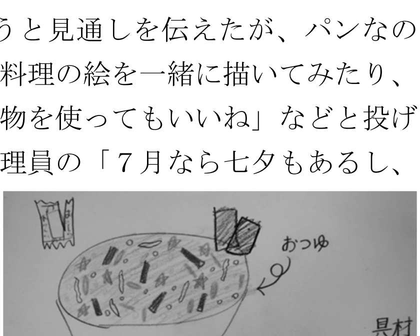

図１ 料理の完成イメージ

６月、麺と野菜にごまだれを和えて試食することにした。子どもたちは「私も（材料を）量りたい！」「次、だれが混ぜる？」などと料理することが楽しくてたまらない様子で、そうしてできあがった試作品を満足そうに食べていた。しかし、ごまだれで全体が灰色くな

ってしまった見ためや濃厚で独特な酸味のある味わいが、このまま給食に出すのは難しいと教師は判断した（図２）。正直に感想を伝え、二学期も活動を継続して料理を改良するか、一学期で終わりにするか、３人で相談するよう促した。７月に学年内の発表が予定されていたこともあり、３人はこれまでの活動をまとめる作業に入り、二学期は新たなプロジェクト活動に移っていった。

図２ 試作した冷やし中華

この活動だけ見ると早々に折り合いをつけたように映るが、子どもたちの食への興味と栄養教諭の関わりは形を変えて続いていく。二学期、A 児とC 児は、D 児と「牛乳プロジェクト」に取り組んだ。３人は様々なメーカーの牛乳パックを集めて、教師に見せにやってきた（図３）。牛乳パックのパッケージは白や青や緑が多いが、まれに赤が使われているパックがあること。どのパックにも共通で記載されている内容もあれば、牛種や、季節による乳脂肪分の変化など独自に書かれている内容があること。教師は子どもたちが持ってきた牛乳パックに引き寄せられ、このような自身の気づきをつぶやいた。その後も３人は、数回に渡って活動の経過を報告に来た。このやりとりを通して、学校で食に携わる者として、また食を楽しむ一員として活動に関わるという役割に改めて気づかされた。

図３ 子どもたちが集めた牛乳パック

・子どもたちの活動をみつめて

活動をふり返ると、A 児とB 児は昨年給食に出した時の達成感や、友達などからおいしいと言ってもらえたうれしさが記憶に残っており、それが一学期の活動当初の「給食に出してみんなにおいしいと言ってもらいたい」という言葉につながったのではないかと考える。子どもたちは活動の途中でこのように書いている。「なかなか給食に出す道のりはむずかしいんだな、と思いました（C 児）」「３年生のときも料理プロで全品だった（※３年生の料理プロジェクトでも給食一食分を考えた）けどその時がとても大変だったので今も大変だと思います（B 児）」昨年、A 児とB 児は給食の一部分をアレンジする形で自分たちの給食を実現させたが、今回は一から料理を考え出すことに挑み、その難しさに直面し、さらにそれを給食として実現するまでの遠い道のりに気がついた。

一学期と二学期で内容は変わっているが、A 児やC 児は継続して食に関するプロジェクトに取り組んでいる。B 児のように他のプロジェクト活動に取り組む子も、それぞれのプロジェクトでの経験があみ糸となって一人ひとりの学びを作っていく。時間をおいてまた食に関する活動に取り組むこともあるだろう。これまでの経験が見え隠れしながら、次のプロジェクトに向かっているように思う。

３　今後に向けて

個々の興味関心にもとづいたプロジェクト型活動において、栄養教諭は給食に携わる者として給食で出せる形を伝えたり、試作品から給食に出せるかを判断したりする役割をもちつつ、子どもたちが自由に決められる場面では子どもを信じて活動を見守る意識をもつようになった。給食以外の選択肢も視野に入れ、食を楽しむ一員として一緒に活動を楽しむ。食育の授業とはまた違った関わりが求められている。

「食をみつめる　自分をみつめる」というテーマのもと、これまでの実践から子どもたちの食をみつめる視点が増えていく様子は見とることができた。一方で、子どもたちが自分の食べることに向き合い、自分の食を考えていく実践には検討の余地があり、栄養教諭の食育の活動として進めていく必要がある。本研究会での授業提案を含め、引き続きこの課題に迫っていきたい。　（足立）

【参考】お茶の水女子大学附属小学校（2024）『第 86 回教育実際指導研究会発表要項 食育部会』
お茶の水女子大学附属小学校（2022）『第 84 回教育実際指導研究会発表要項 食育部会』